

大学院の現在と将来・社会人大学院

神戸大学大学院

大学が実学を教えるということ

加茂 英司

大阪学院大学・流通科学部
かも・えいじ

慌ただしく

職場を飛び出す

日々

平成二年から四年にかけて、松下電器産業の国際部門に勤務しながら神戸大学の社会人大学院に通っていた私の生活はこんな調子だった。

午後五時十五分。終業のベルが鳴るや否や書類をまとめて職場を飛び出す。大阪市内の中心部にある職場から地下鉄と電車を乗り継ぎ、大学に向かう。大学の着くのは六時過ぎ。授業は六時半からなので、急いで大学食堂でうどんをかき込む。教室の中には十五名の学生である。学生とは言え、昼間は仕事を持つ社会人ばかりだから、全員スーツ姿。知らない人が見たら、どこかの企業の研修所に

迷い込んだと錯覚するかもしれない。少々疲れた顔をしてはいるものの、自分の成長のために時間とエネルギーを使っている意気込みからか、晴ればれとした表情が印象的だ。授業はディスカッション中心に進む。事前に与えられたテキストを読んで来るので、進行係りの学生が中心になってすぐに白熱した議論になる。初回の授業で配布されるシラバスどおりに授業は進行する。ゼミナールは大学院生活の中心である。初年度に行ったグループ研究は、慣れない研究活動の導入的プログラムとして機能した。土曜日や日曜日にも必要とあれば集まった。

その他、楽しかった授業はケーススタディーである。教授陣が取材を元に作ったケースをもとに「その戦略は違うよ」「いや、別の資料にはこんなことが書いてある」と議論は続く。

授業は九時近くになっても終わりそうにない。規定は八時十分までだから、大幅な時間超過。もちろん、私たちが熱心なのと言うまでもないが、いつも時間を超過してつきあってくれた教授達もたいがい熱心だった。どうして私たちはこんな熱心なのだろうか。それは学生達がそれぞれの職場でのプロフェッショナルだからである。様々な企業から十年前後の経験を積んだ社会人が集まっているので、

とにかく刺激になる情報交換ができる。社会人大学院とは教授から学生への一方通行の場所ではなく、教授と学生、あるいは学生同士の相方向の情報飛び交う場所なのである。

その意味で、社会人大学院に入学するには、まず自分がプロフェッショナルでなければならぬ。多くの社会人大学院が受験資格に数年の勤務経験を課しているのはそのためなのである。

勉強したい一心で

大学を卒業し、迷わず、サラリーマンになった。安定した収入と社会的地位。収入も地位も、とびきり高いというわけではないだろうが、まあ満足すべき水準だろう。

生活は毎日決まったパターンを繰り返していた。七時半の通勤電車に乗り、会社に着けば、夜遅くまで働くことを当然とする生活である。国際部門なので、海外法人との商談が主な仕事であった。価格を決めたり、出荷数量を決めたりしているうちに、夜の九時、十時になることは日常茶飯事。時期によっては会社の近くのカプセルホテルに泊まる日々も続く。職場の誰もがそうなので、そんな生活で良いのかどうかを考えもしなかった。「学生時代とは違った充実した日々だな」なんて、むしろ喜んでいたくらいであ

る。

しかし、そんな無茶な生活を二、三年も送れば、これではよいのだろうかなんて考え始めるのは当然だったと思う。とにかく無茶な生活である。今日が雨なのか晴れなのか、寒いのか、暑いのかさえわからない。来る日も来る日もビルの中で、トレックスを打ち、ファクスを送り、書類を作り、会議ばかりしているのだから。外国語のとびかう華やかなオフィスの中で、そしてはためから見れば、エリートと目される一流企業の社員であった私は、自分のあり方に悩んでいたのだ。

「仕事とはそんなものだ」「サラリーマンとはそんなものだ」と言ってしまうばそうなのかもしれない。しかし、まだ二十代の若造であった私には、何か納得できない気持ちの中心に広がっていた。「会社の外のことを知りた

い」率直に思った。割り切りの良い性格だからか。何でも良いから、勉強しようとする単純に考えた。勉強でもしたら、少しでも気分転換ができるかなと思ったのである。

仕事は相変わらず忙しかったが、能率をあげ、工夫をすることで、勉強の時間を確保した。手始めに、講演会や異業種交流会に参加した。専門学校へフランス語を習いにも

行った。そんな生活を一、二年、続けた頃、もっと本格的に学びたいと思うようになった。できれば大学院で学びたい。しかし仕事を辞めることはできない。そこで知ったのが、当時、始まったばかりの「夜間大学院」であった。

社会人の

再教育の

場として

仕事を終えてから駆けつける夜間大学院は予想外におもしろかった。様々な業種から集まる、様々な年代のクラスメイトとの議論は、知的欲求を満たしてくれた。私の世界を広げてくれたのである。会社の外のことを知りたかった私が、まさに望んでいたものがそこにあった。

一般に、社会人大学院と呼ばれている夜間大学院の特徴は、次の二点である。

一つは、従来の大学院とは違い、実学を教える大学院だという点である。実際の企業を取材したケースを教材に使うことはもちろんのこと、学生達の経験をフルに生かしながら進める授業は、日本の大学がその歴史上、初めて行った教授法であろう。

もう一つの特徴は、「社会人に優しいシステム作り」である。忙しい社会人が入学するには、まず入学試験から専門の試験を免除しなければならない。また、仕事を終えてから通学するためには、平日の夜間や週末だけで修了でき

るように授業時間を組まなければならない。大学によっては、便利な都心のターミナルに、新たに教室を確保している。細かい配慮である。

欧米では、大学院そのものが大衆化し、インターネットを使った大学院、通信教育の大学院もある。もちろん、夜間や週末の大学院は大都市なら必ずといって良いほど、普及している。

都心中の都心であるマンハッタンに、私立のニューヨーク大学がある。数年前に訪れる機会があったが、ニューヨーク大学はまさに社会人のための大学院であった。日も暮れる頃には、パリッとスーツを着こんだ男女があらここちから現れて、ビルの立ち並ぶニューヨーク大学のキャンパスに溢れかえる。学生ラウンジにある電光掲示板には、目と鼻の先にあるウォール・ストリートからの株価情報が映し出される。アメリカ人のエリートは非常に勤勉である。働き、学び、自分を磨き続けることによって地位と金を手にする。ドライで、非常にわかりやすい方法を実践しているのだ。彼らだって生活があるから、アフター5や週末を利用して通学できることは大いに助かる。

教員には厳しい

もちろん、社会人大学院に問題が無い

社会人教育

わけではない。各大学が社会人大学院の新設を苦勞しているのは「ウチの大学には社会人を教えられる先生がいない」という問題である。

社会人を教えることは確かにむづかしい。社会人学生は社会経験豊富だ。教員が下手なことをしゃべろうものなら、とたんに学生の方から反論を浴びせかけられる。私自身、教員に何度も反論した。教えにくい学生だったであろう。

数も増えてきた社会人大学院の中で、本当に、学生が満足する授業を提供できる大学院の数は少ないということを知っている。若い、二十歳そこそこの、社会を知らない学生を教えることに甘え、あるいは慣れることによって、教員が最新の情報を仕入れることを怠っているのではないだろうか。あるいは、学問への貢献を隠れ蓑にして、実学の研究から逃げているのではないだろうか。

過小評価も

大学院を修了することに対する、社会や企業からの評価の問題もある。私は、大学院

過大評価も

を出たというその事実だけで人を評価することを非常に危険だと思う。

要らない

「大学院修了者の社会的評価を確立することが必要だ」

と、多くの大学関係者が発言するのであるが、私はそうは思わない。大学院を出る、大学院で学ぶということは、そこで何を学び、何を得るかということであり、修了後、自ずと個人の実力が発揮されることで表現されれば良いと思う。修士、博士という学位が評価されることは、偏差値で輪切りされることで社会的機能を果たしている大学学部の現状を、そのまま大学院によって置き換えることに過ぎないのではないか。

さらなる問題は、大学院修了者の過小評価である。「社会人大学院に通学する事で会社から辞めてくれと言われてた」「出世が遅れた」という言う話はよく耳にする話であり、「そもそも受験の話すら会社にできない」ために受験を諦めているサラリーマン諸氏の何と多いことか。

「残業が常態化している職場から、五時過ぎに退社することの（無言の）非難。残業云々というレベルではなく、「会社の外に目を向けること」に対する、日本のサラリーマンが抱えている被支配者としての構造的な問題。これこそが、アフター5や週末における自己啓発さえ思うに不らず、日本経済を閉塞状況に追いやっていく基本的な問題なのである。

迷える現代人の
社会人大学院は平成元年に筑波大学
(東京都文京区)、神戸大学、名古屋大
学、立大学が始まった。歴史そのものが新
切り所として

しいのであるが、近年、変質を始めている。

新しく設立される社会人大学院は、さらに通学しやすい工夫作りを検討、実施しているのだ。修了年限に縛られずに単位を累積加算する方式。平日よりも、土曜日、日曜日だけの大学院。修士論文よりも短い課題研究をもって課程修了を認める方式などである。平成七年度からは、社会人向けの博士後期課程の新設が相次いだ。社会人教育を囲む事情は急速に改善されている。

社会人大学院時代には、学業以外にも楽しい思い出が一杯だ。合宿。東南アジアへの卒業旅行。何よりもそれらを通しての学友との語らい。昼間はサラリーマン、夜は大学院生という二重生活の中で、多くを学ぶ事ができた。

指針無き時代に、迷える現代人が、大学院で学ぶことに
拠り所を求め始めたとしても無理はあるまい。